論文の内容の要旨

論文題目　　李箱のモダニズム研究　1936 年を中心に

氏名　　崔　真　碩

本論文は、1936 年とその同時性に注目して、李箱のテクストを牧野信一と横光利一のテクストと共に分析している。

本論（Ⅰ部～Ⅳ部）では、「植民地的近代」と「自己植民地化」、この二つの概念の理論的接合を方法論として、とりわけ「植民地的近代」が孕む「内なる植民地主義」としての「自己植民地化」に対する態度の共通性と差異に着目しながら、李箱、牧野、そして横光のテクストを分析している。その内容は、以下の五点にまとめることができる。

- 一点目は、1936 年の李箱のモダニズムは、朝鮮近代が抱える内在的矛盾を自己省察したり朝鮮の危機の時代を予感しながら、近代を烏瞰しているということだ。李箱の「敗者」の思想〈敗者は敗者としての生存過程を形成しつつ、適応の原理により変形・転位したに止まる〉が文学化されている 1936 年のテクスト群の分析を通じて、そのことが明らかになった。たとえば、日中戦争前夜および内鮮一体前夜である 1936 年、李箱は代表作「翼」において、その後の日本帝国主義の肥大化とそれに伴って植民地朝鮮が翻弄される危機の時代を予感するなかで、「敗者」の思想を「翼」の「僕」を通して形象化しながら、近代の内面化と行為遂行的に自己植民地化してゆく複雑化する植民地状況を捕捉しえている。
- 二点目は、東京に行った李箱が深刻な失望のなかで見た、「牧野が味わった最後の刹那の心境」とは、近代の深淵を覗いてしまった牧野の寂寞とした孤独ではなかったか、

ということだ。また、1936 年、近代の深淵を覗いてしまった李箱牧野（牧野を内包している李箱）は、近代を極限まで問いながら自己分裂していったということだ。1936 年の李箱のテクストを牧野のテクストと共に分析することでそれらのことが明らかになった。

- 三点目は、李箱牧野の 1936 年を軸にして東アジア近代を捉え直すとき、1936 年は「近代の超克」へ向かう／向かわない近代の転換点であるということだ。李箱と牧野と横光の 1936 年のテクストを共に分析することでそのことが明らかになった。西洋と東洋を貫通する普遍的思想をもって、近代の深淵を覗いてしまった李箱牧野の 1936 年は、「近代の超克」へ向かわないという在り方を示しながら、「近代の超克」そのものを相対化している。その一方で、横光は 1936 年、李箱牧野とは対照的に、「近代の超克」への欲望とともに東洋主義や日本主義などの伝統へと回帰する。すなわち、「近代の超克」へ向かう。
- 四点目は、「近代の超克」へ向かう／向かわない近代の転換点にあるものは、自己否定の行為――主体が自己自身と充足関係をなすと考えられている、仮想された安定状態をかき乱す――であるということだ。大東亜戦争や大東亜文化に対する自己否定の行為を貫いた戦時期の竹内好のテクストを参照することでそのことが明らかになった。1941 年 12 月 8 日の段階における横光と竹内のアジア太平洋戦争開戦の受け止め方と東亜新秩序への支持は同質のものだったが、自己否定の行為の有無がその後の二人を分け隔てている。李箱牧野と同様に、戦時期の竹内は、自己否定の行為を経ない「近代の超克」へ向かわない。
- 五点目は、横光は 1936 年の渡欧以降、自己否定の行為を回避し続けたゆえに、超克の幻想に囚われたまま「近代の超克」を欲望し、ひたすら自己植民地化し続けたということだ。李箱牧野の 1936 年と対照することでそのことが明らかになった。戦時期の横光が陥った陥穽は、日本をはじめとする非西洋の近代、すなわち、ウェスタンインパクト以後、西洋に侵入されながら近代化を遂げた東アジアの植民地的近代が抱えるアポリアである。東アジアの植民地的近代においては、自己否定の行為を経ない限り、戦時期の横光のように、自己植民地化した自分と向き合うことができないまま、ひたすら、近代の内面化と行為遂行的に自己植民地化してゆくことになる。

以上のように、本論の分析では、李箱、牧野、そして横光の自己植民地化に対する態度の共通性と差異が明確に表れる 1936 年を通じて、さらには 1937 年以後の世界をも視野に入れることで、「近代の超克」へ向かう／向かわない近代の転換点とその転換点にあるものを明らかにしている。

終章では、本論での分析を展開しながら、李箱のモダニズム研究を深めている。敗戦後に書かれた竹内好の近代論「近代とは何か――日本と中国の場合」を手がかりにしながら、李箱のモダニズムの在り方を根底から規定している「近代」について再考している。その

ことによって、李箱のモダニズムが持つ可能性を引き出している。それは以下の三点にまとめることができる。

- 一点目は、李箱のモダニズムは、〈ポスト植民地的近代〉への意志を持つことだ。近代を極限まで問いながら自己が分裂していった李箱牧野は、その引き裂かれの中心において、パロディや（ブラック）ユーモアをもって敗北＝自己植民地化に対して「掙扎」している。竹内魯迅の言葉を借りて言えば、李箱牧野は、その創作活動において、敗北＝自己植民地化に対する「掙扎」を止めなかったし、敗北＝自己植民地化を忘れることに対して「掙扎」し続けた。そして、李箱牧野は 1936 年、「近代の超克」へ向かわない。以上のことから、本論文は、李箱のモダニズムに、植民地的近代が孕む内なる植民地主義としての自己植民地化を脱しようとする、〈ポスト植民地的近代〉への意志を見出した。
- 二点目は、李箱のモダニズムは、東アジアへと開かれていることだ。李箱と竹内と魯迅。東アジアの植民地的近代を生きながら「掙扎」を止めなかった者たちの在り方から、近代化の荒波に呑まれて西洋近代に対する敗北感を忘れ去り、決定的に敗北＝自己植民地化し続けてきた／いる東アジア近代の裏面に在る、もうひとつの東アジア近代の在り方が見えてくる。それは言わば、〈東アジア近代の影〉として在る。東アジア近代を烏瞰する「敗者」あるいは「ドレイ」の眼を持つ彼らは、〈東アジア近代の影〉を媒介にして直結している。〈東アジア近代の影〉を媒介にした彼らの直結は、西洋によって侵入され敗北＝自己植民地化した東アジア近代が先験的に孕んでいる（内なる）植民地主義を脱する、〈ポスト植民地的近代〉の可能性を示唆している。1936 年に「近代の超克」へ向かわないまま、東アジア近代の影へ向けて開かれている李箱の「掙扎」としてのモダニズムを、本論文は〈影の東アジアモダニズム〉と名付けた。
- 三点目は、李箱のモダニズムは、〈ポストコロニアルモダニズム〉であることだ。植民地的近代が孕む内なる植民地主義としての自己植民地化に対する態度の差異を通じて、李箱と横光のモダニズムを対置すれば、李箱のモダニズムとは、植民地的近代が孕む植民地主義を捉えられない、植民地的近代主義者のコロニアルモダニズムを内在的に否定するという意味での、〈ポストコロニアルモダニズム〉であることが明確になる。すなわち、李箱のモダニズムは、モダニズムの両面価値性（アンビヴァレンス）を照らしだすとともに、ポストモダニズムとは何かを再定義しているのである。